安田学術研究論集　52，1-8　2023.　　doi : 10.24613/0002000002

原著論文

「棲霞山人游露詩稿」注釈
―佐藤六石が添削した後藤新平の肉筆漢詩草稿を読む―

内　田　誠　一

Commentary on *Seika-sanjin Yuro Shiko* (*Annotated Draft of Chinese Poems on His Visit to Russia by Seika-sanjin*) : Reading the Manuscript of Chinese Poems in Shinpei Goto's Own Hand with Corrections by Rikuseki Sato

Seiichi Uchida

要　　旨

明治大正期に活躍した官僚・政治家の後藤新平は漢詩を能くした。後藤が自筆で認めた漢詩七首の草稿「棲霞山人游露詩稿」がある。本稿ではまずこの詩稿を翻刻した上で、歴史資料を用いて詩の背景を踏まえながら、注釈をつけた。また、「後藤新平文書　Y1-01-3」中の漢詩草稿との文字の異同も指摘した。「棲霞山人游露詩稿」には、森槐南の弟子・佐藤六石の添削が見える。後藤が訪露途上の漢詩草稿を佐藤に進呈した理由についても考察した。

キーワード：後藤新平、佐藤六石、伊藤博文、森槐南、漢詩

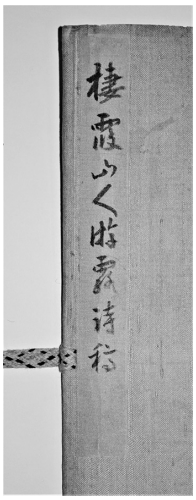

図１　題簽

安田女子大学大学院文学研究科日本語日本文学専攻
安田女子大学文学部書道学科

一、序

ここに「棲霞山人游露詩稿」（以下、「游露詩稿」）なる毛筆題簽（図１）のある一巻の巻物がある。「棲霞山人」は、医師・官僚・政治家であった後藤新平の号。後藤が毛筆を揮って七言絶句七首を認めている。草卒な風情で書き散らした書巻ではあるが、実に能筆で書法自体も鑑賞するに足るものと言えよう。一部の作品には、漢詩人・佐藤六石の赤鉛筆による添削が見える。また巻末には、佐藤による漢文体の毛筆跋文（1916年）六行が備わる。跋文によると、これは後藤が桂太郎と訪露した際（1912年）の途上の詩で、後藤が同年８月に帰国した後に認めて佐藤に示し、佐藤が朱を入れたもの（図２にその一例を示す）。

本稿ではこの詩稿を翻刻し、注釈を付けようと思う。さらに、J-DAKの近現代史料データベースの中の「オンライン版後藤新平文書」の「後藤新平文書Y1-01-3」（以下、後藤文書）中の漢詩草稿[1]を精査したところ、「游露詩稿」と同じ詩が収められていたが、文字の異同が少なからず見られたため、これについても指摘したい。

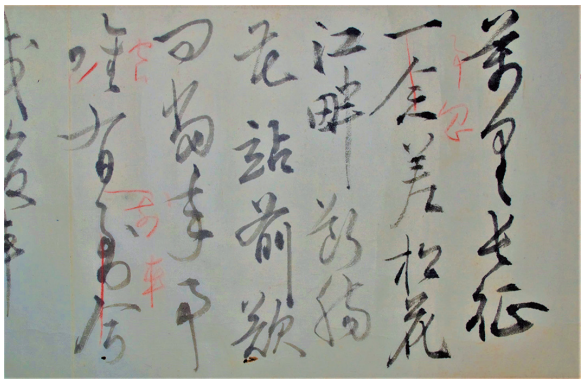

図２　巻頭の「哈爾賓車站惟藤公」詩の入朱部分拡大

二、「棲霞山人游露詩稿」翻刻

翻刻する前に、まず詩の作者・後藤新平と添削者・佐藤六石について略述しておきたい。

後藤新平（1857 ～ 1929）、医師・内務官僚・政治家。水沢藩出身。須賀川医学校卒。愛知県立病院長を経て内務省に入省し、ドイツ留学を経て衛生局長。台湾総督府民政局長・南満州鉄道会社初代総裁を歴任。第二次桂太郎内閣で逓信大臣・鉄道院総裁。寺内内閣では内務大臣、外務大臣を歴任。のち東京市長となり、関東大震災復興に尽力した。なお、この詩稿は第二次桂内閣が総辞職した翌年８月以降に書かれたもの。

佐藤六石（1864 ～ 1927）、明治・大正期の著名な漢詩人[2]。名は寛、字は子栗・公綽、六石はその号。越後新発田の人。大野恥堂・森春濤・森槐南に学んだ。若くして新潟日日新聞編輯長、古事類苑編纂委員、慶應義塾大学教授を歴任。1890年、森槐南主宰の詩社である星社に入る。1905年、伊藤が初代韓国統監となると、李王家顧問に推挙され、英親王李垠（イ・ウン）の侍読となった。大阪府立中之島図書館に収蔵される韓国の古書は、その多くが佐藤の蒐集したもの[3]。1917年に、随鷗吟社（1904年に大久保湘南が創設した詩社）の主幹となった。著に『六石山房詩文鈔』等がある。

詩稿の装丁や法量などについては以下の通り。

作品名	棲霞山人游露詩稿（題簽による）
作者名	後藤新平（佐藤六石添削・跋文）
装丁	巻物（二枚の詩稿を合装。便宜的に前半を詩稿１、後半を詩稿２とする）
数量	一巻
材質・技法	紙本墨書
法量	詩稿１：縦18.2×横158.2糎 詩稿２：縦19.1×横46.8
年代	1912（大正元）年８月。佐藤の跋文は1916（大正５）年陰暦11月

では以下、詩稿巻物を翻刻する。

題簽（佐藤六石筆）「棲霞山人游露詩稿」

詩稿１

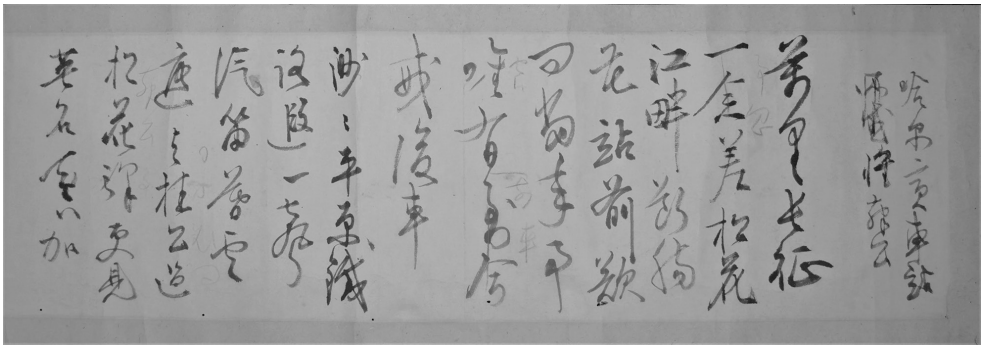

図３　巻頭の「哈爾賓車站惟藤公」詩二首部分

哈尔賓車站／~~所感~~惟藤公

※墨筆で縦線複数本を引いて「書感」二字を削ったのは後藤自身。

萬里長征／~~一念~~事忽差松花／江畔斷腸／花站前欲／問當年事／~~唯有到今~~空前車／戒後車／渺々平原鐵路／遐一聲汽笛暮雲／遮与桂公過（○尤問）／松花驛（○藤公事）更見／英明天下加

※○は佐藤が朱筆で付した圏点を表す。

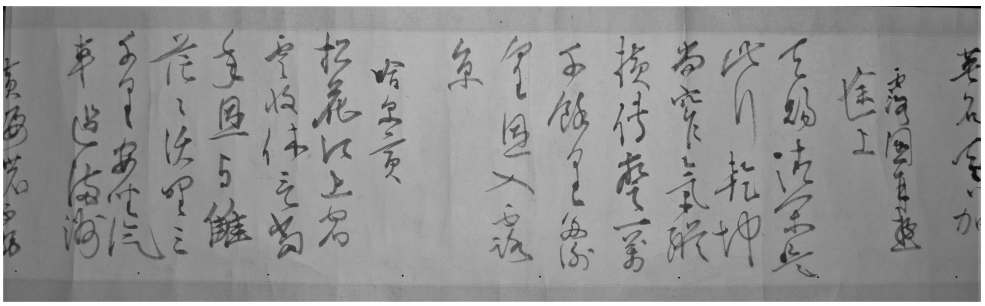

図４　「露国再遊途上」詩と「哈爾賓」詩部分

露國再遊途上
天賜清閑是／此行乾坤／尚窄氣縱／横傳聲一萬／千餘里多謝／皇恩入露／京

哈尔賓
松花江上宿／雲收休气當年恩与讎／茫々沃野三／千里安坐汽／車過満州

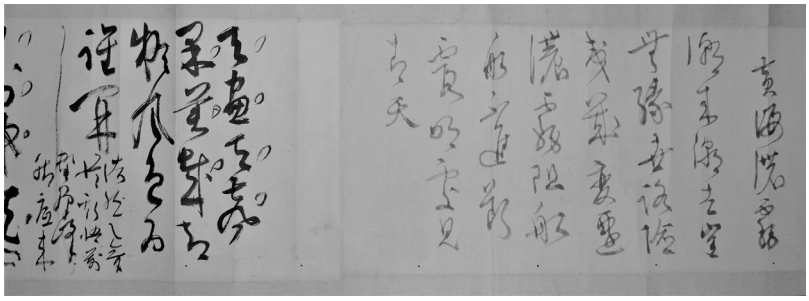

図５　「黄海濃霧」詩と「天画天声・・・」詩部分

黄海濃霧
潮來潮去豈／無縁世路險／夷幾變遷／濃霧阻船／船不進斷／霞明處見／青天

詩稿2
○○○○　○○○
天画天聲／果美哉起／疑風色為／誰開浩然之氣／長斯悟前／野盡峰／秋底來

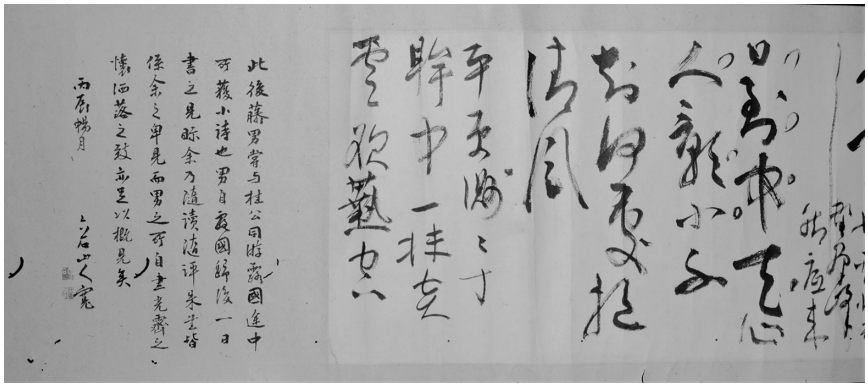

図６　巻末の詩「日到天心・・・」と跋文部分

○○○○　○○○
日到中天心／人影小不／知何處抱／清風／
平原渺々寸／眸中一抹炎／雲欲蘇空
※「日到中天」の「中」の字の上には、左上から右下へ渇筆で線が引かれ、削られている。

跋文
此後藤男嘗与桂公同游露國途中／所獲小詩也男自露國歸後一日／書之見眎余乃隨讀隨評朱書皆／係余之卑見詩而男之所自書光霽之／懐洒落之致亦足以概見矣
　丙辰暢月　六石山人寛／「六石」「寛印」（朱文連印）

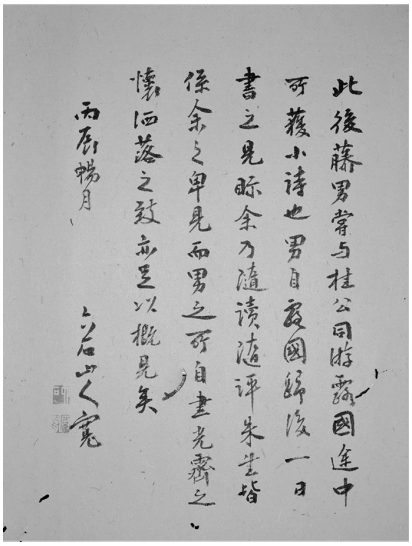

図７　佐藤六石跋文の部分拡大

三、游露詩稿注釈

では次に、いま翻刻した七首の七言絶句を書き下した上で、注釈を付けることとしたい。なお、詩の本文は旧字体、書き下し文は新字体に現代仮名遣いを用いた。なお、[　] 内の文字は筆者内田が補ったもの。

哈尔賓車站惟藤公［二首］（哈尔賓車站（しゃたん）にて藤公を惟（おも）う［二首］）

題意：ハルビン駅で亡き伊藤博文公に思いを巡らせたうた。

韻字：「差・花・車」（其一）「遐・遮・加」（其二）（いずれも下平声六麻韻）

［其一］

萬里長征一念差	万里 長征して 一念差（たが）い
松花江畔斷腸花	松花江畔 断腸の花
站前欲問當年事	站前（たんぜん）問わんと欲す　当年の事
唯有到今戒後車	唯（た）だ今に到るまで後車を戒むる有るのみ

添削後

萬里長征事忽差	万里 長征して 事忽（たちま）ち差（つまづ）く
松花江畔斷腸花	松花江畔 断腸の花
站前欲問當年事	站前 問わんと欲す 当年の事
唯有前車戒後車	唯だ前車の後車を戒むる有るのみ

○哈尔賓車站：ハルビンの駅。○惟藤公：伊藤博文公（の遭難当時）に思いを巡らす。

○長征：遠方に行く。ここでの「征」は遠くまで行くの意。

○事忽差：伊藤公の外遊は（暗殺によって）突如として失敗に終わった。「差」には「誤る」の意があるが、ここでは「蹉」に通じ、躓（つまづ）くの意。

○松花江：アムール川（黒竜江・黒河）の支流でハルビン市を流れる。

○断腸花：秋海棠の異名。品種にも因るが、中国大陸では７月に開花する。後藤が訪れた７月、河畔にはこの花が咲いていたのであろう。敢えて異名を用いて、亡き伊藤公の（加えて作者の）断腸の思いを表現した。

○当年事：３年前の 1909（明治 42）年 10 月 26 日に、ハルビン駅頭にて伊藤が安重根に暗殺された時のこと。なお、後藤のこの詩稿を添削した佐藤六石は、前述の通り森槐南（1863 ～ 1911）の弟子である。その槐南は伊藤が訪露する際に秘書官として随行。伊藤暗殺事件の際に傍に居たため被弾したが軽傷であった。その約 16 か月後に逝去したのは、銃創が原因とも言われている。

○前車戒後車：『漢書』賈誼伝を出典とする「前車覆、後者戒（前車の覆るは後者の戒）」という故事成語を五文字で表わした。過去の失敗を見て現在の戒めとすること。ここでは伊藤暗殺事件を肝に銘じて桂・後藤一行が自分たちの安全に注意することを云う。なお、佐藤が「唯有到今戒後車」を「唯有前車戒後車」に改めたのは、「唯有到今戒後車」では、「戒」の主語が無いからであろう。

■後藤文書では、佐藤添削後の第一句の「事」を「東」に作る。翻字の際の誤りであろう。

また、第二、三句は「茫々江水是松花、飛来鉄笛伋嗚咽」とかなりの改変が見られる。

ただ、第二句の「伋嗚咽」は「伋」では意味が通らないので「仍（しきりに）」の字を誤読して翻字したものと想像される。第四句の「唯有」は「空見」に作る。「戒」は「威」に作るが、意味が通らないのでこれも翻字の誤りと思われる。

［其二］

渺々平原鐵路遐	渺々（びょうびょう）たる平原 鉄路遐（とお）く
一聲氣笛暮雲遮	一声の汽笛 暮雲遮（さえぎ）る
与桂公過松花驛	桂公と過ぐ 松花の駅
更見英名天下加	更に英名の天下に加うるを見ゆ

添削後

渺々平原鐵路遐	渺々たる平原 鉄路遐く
一聲氣笛暮雲遮	一声の汽笛 暮雲遮る
桂公尤問藤公事	桂公 尤も問う藤公の事
更見英名天下加	更に英名の天下に加うるを見ゆ

○鉄路遐：鉄道の線路が遥か遠くまで続いていることを言う。

○桂公尤問藤公事　桂首相がとりわけ伊藤公暗殺当時のことを訊ねた。なお、原作の「与桂公過松花駅」を佐藤がこのように改めたのは、平仄に問題があったからであろう。「与桂公過松花駅」では仄仄平仄平平仄となり、二四不同・二六対となっておらず、絶句の基本から外れている。そのため二字目の仄字（「桂」）を平字にする必要がある。そこで「桂公」を句頭において「桂公尤問藤公事（仄平平仄平平仄）」とした。

○更見英名天下加：亡き伊藤公の名声がさらに天下に響いているのを覚（さと）った。「見」は「みゆ」と訓じて「覚る、知る」の意。

■後藤文書では、第一句「渺々」を「奔々」に改めている。第二～四句は「停車何耐聴悲笳。英雄碧

血自千古、驚見名声身後加」と改変している。

露國再遊途上（露国再遊の途上）

題意：ロシア再訪の途上、厳戒態勢の中でゆったりとサンクトペテルブルクへ向かうことができることをニコライ２世に感謝する詩。

韻字：「行・横・京」（下平声八庚韻）

天賜清閑是此行　天賜の清閑 是れ此の行
乾坤尚窄氣縱横　乾坤 尚お窄ぐ 気の縱横
傳警一萬千餘里　伝警す 一万千余里
多謝皇恩入露京　皇恩に多謝して露京に入る

○露国再遊：後藤は1908（明治41）年５月にロシアを訪問し、ニコライ２世に拝謁しており、二度目の訪露であるため斯く言う。
○清閑：のどかでゆったりしていること。
○乾坤：天地。
○気縱横：（天地間の）気が自由であること。
○伝警一万千余里：「伝警」は伝え戒める意。「一万千余里」は一行の当初の行程。一行を護衛せよとのニコライ２世の命令が先々まで行き渡っていることを言う。
○多謝皇恩：ニコライ２世の恩徳により、厳重な警護のもとで都へ移動できることに感謝する。
○露京：ロシアの都サンクトペテルブルク。一行は７月21日に都に到着した。本詩はそれ以前に詠まれたものと思われる。
■後藤文書では、詩題を「再遊露国途上」に作る。第二句の上四字を「山河到処」に作る。第三句は「安車一万三千里」に作る。第四句の上二字を「荷得（荷ひ得たり）」に作る。これでは「皇恩」は日本国天皇の恩沢となろう。ニコライ２世への感謝を表す詩から、天皇の恩徳に感謝する詩に改めたのであろう。

哈爾賓（哈爾賓）

題意：ハルビン駅から汽車に乗って満洲を過ぎた辺りで詠じた詩。

韻字：「収・讎・州」（下平声十一尤韻）

松花江上宿雲收　松花江上 宿雲收まり
休气當年恩与讎　气を休む 当年の恩と讎と
茫々沃野三千里　茫々たる沃野 三千里
安坐滊車過滿州　汽車に安坐して満州を過ぐ
○宿雲：夜の雲。　○休气：气は気と同義。
○茫茫沃野：遥か遠くまで続く肥沃な田野。
○安坐：やすらかに坐る。
■後藤文書では、第二句「休气」を「消尽」（消し尽す）に作る。こちらの方が解り易い。
第三句の「沃」の字は読み取りにくかったようで、翻字せずに、行書体のままにして、その文字の右側に「？」を付している。第四句の「過」も同様で、これまた行書体のままにしているが、後藤は「巡」（めぐる）に改変していると考えられる。

黄海濃霧（黄海の濃霧）

題意：黄海を船で通る際に、濃霧で船の運航に支障があることを詠じつつ、内外の政治情勢への対応も難航していることに思いをはせた詩。

韻字：「縁・遷・天」（下平声一先韻）

潮來潮去豈無縁　潮来り潮去るは豈に縁無からんや
世路險夷幾變遷　世路の険夷 幾たびか変遷す
濃霧阻船船不進　濃霧 船を阻みて 船進まず
斷霞明處見青天　断霞 明らかなる処 青天を見る

○黄海：太平洋の縁海の一つ。中国と朝鮮半島の間にある内海。黄河の流入により黄濁。
○濃霧：龍居頼三『随行日乗』[4]に七月十日から十一日にかけて濃霧に鎖されていたことが記される。
○斷霞明處見青天：霞の切れ目の明るいところに青空が見えたことを言う。
■後藤文書では、第二句「世路險夷」を「水路仍看」（水路 仍お看る）に作る。第三句「船不進」を「黄海黒」（黄海 黒し）に作る。また第四句全てを「長風一陣忽青天」（長風一陣 忽ち青天）に大胆に改変している。

無題詩

以下二首の詩は題が記されていない。「游露詩稿」では転結二句が起承二句の前に書かれている、と押韻の箇所から判断できる。漢詩作法において「結句から作れ」という言い方があるように、結句の伏線である起承二句は結句を作ってからにすると作り易いという考えがある。恐らく後藤も結句から作ることがあったと想像される。

以下では起承・転結の順に直して表記した。

第一首

韻字：「来・哉・開」（上平声十灰韻）

浩然之氣長斯悟　浩然の気 長に斯れ悟る
萬野盡峰秋底來　万野尽峰 秋 底ぞ来たる
天画天聲果美哉　天画天声 果たして美なるかな
起疑風色爲誰開　疑いを起こす 風色 誰が為に開くと

○風色：景色。眺め。
○浩然之気：天地間に充満する正気。
○底：「なんゾ」と訓じて感嘆を表す。なんと。

第二首
韻字：「中・空・風」（上平声一東韻）

平原渺々寸眸中　平原渺々 寸眸(すんぼう)の中(うち)
一抹炎雲欲爇空　一抹の炎雲 空を爇(もや)さんと欲す
日到天心人影小　日は天心に到りて 人影小さし
不知何處抱清風　知らず 何れの処にか清風を抱かん

○寸眸：小さなひとみ。　○炎雲：夏の雲。
○欲爇：燃やさんばかりである。

跋　文（佐藤六石筆）

此後藤男嘗与桂公同游露國途中所獲小詩也。男自露國歸後一日書之見眎余。乃隨讀隨評朱書。皆係余之卑見。而男之所自書、光霽之懷、洒落之致、亦足以概見矣。（此れ 後藤男(だんかつ) 嘗(かつて)て桂公と同(とも)に露国に遊ぶ途中に獲たる小詩なり。男 露国より帰りて後、一日(いちじつ)之を余に視(しめ)さる。乃ち読むに随い評するに随いて朱書す。皆な余の卑見に係る。而して男の自書する所、光霽(こうせい)の懐(おもい)、洒落(しゃらく)の致(おもむき)も亦(また)以て概見するに足らん。）

○後藤男：後藤男爵の略。
○小詩：短詩。この詩稿に書かれた中国古典詩（漢詩）はすべて絶句（四句からなる詩）ゆえに斯く云う。
○帰国後一日：帰国した翌日とも解せるが、ここでは帰国後の或る日の意か。
○見眎余：「見」は受身を表す。「眎」は「視」の異体字で明示するの意。
○光霽之懷：光風霽月のように清らかでおだやかな心意。
○洒落之致：さっぱりとして、わだかまりのない風格。
○足以概見矣：（その心意や風格の）おおよそのところを窺い知ることができるであろう。「矣」はよく断定の語気を表す文字であるが、ここでは推量の語気を表す。

四、この詩稿はなぜ佐藤に贈られたのか
―― 結語にかえて

前述したように、「游露詩稿」は佐藤の跋文の内容から、後藤が帰国後に認めて佐藤に示し、佐藤が朱を入れたものと思われる。御厨貴『後藤新平大全』（藤原書店、2007年）112頁の後藤新平年譜1912年10月17日の条に「神戸から佐藤六石、菊池忠三郎、下村当吉を伴い台湾に向かう」とあり、20日に「台北着」、11月11日に「帰京」とある。詩稿1を台湾で認めて佐藤に見せた可能性もあろう。

淡墨で認められた詩稿1は、後藤自身における推敲がなされた後に揮毫されたものと思われる。対して濃墨で書かれた詩稿2は、詩句を思いついて咄嗟にメモしたような雰囲気が感じられる。1は跋文にある通り、後藤が帰国後に書いたものであるが、2は現地において―即ち哈爾浜およびその直後の行程において―書きとめられたものと見てよいであろう。つまり、1と2とでは、書写した時と場所が異なると判断される。

佐藤は後藤から見せられた詩稿を添削した後に後藤に返却したのであろうが、後藤は添削部分を確認した後に、佐藤に詩稿を贈ったと思われる。巻物に佐藤の毛筆による題簽と跋文が付されている所以である。ではなぜ佐藤に贈ったのか。それは佐藤の漢詩の師が森槐南であったからであろう。前述の通り、槐南は伊藤博文が訪露する際に随行し、伊藤が狙撃された現場にいて銃創を負っている。哈爾浜駅で伊藤狙撃の場所を確認し、その時の情況を現地で聞いた後藤は、佐藤に哈爾浜駅やその付近の様子を伝えようとしたのであろう。そこで訪露途上の詩作の中から、敢えて哈爾浜の詩を書して示したのだ、と考えるのが自然であろう。

後藤は能書家[5]であり政治家という立場もあって自らの書を多く残しており、掛軸や扁額に表具されて現代まで伝わっている。そのような余所行きの書も魅力があるが、本稿で取りあげた草稿も、佐藤の添削と相俟って興味をそそられるものであった。また、後藤の漢詩は難しい典故や詩語を使わず、平明な語を以て自らの思いを率直に表現している。とりわけ伊藤暗殺事件の場所に、同じく日本の代表として訪露して、その途上に事件現場に身を置いた後藤の心には様々な思いが交錯したと思われる。それゆえに後世の読者の心の琴線にも触れる得難いものと言えよう。

また、本稿で翻刻した詩の多くは後藤文書に見られるが、かなり改変されているものもあった。「游露詩稿」を書して以後、折にふれて自ら改めたり、徳富蘇峰や佐藤六石に添削を求めたりしたものと想像される。後藤の詠詩の過程や苦心の痕跡を仔細に見ることのできる貴重なものと見るべきであろう。

注

1．後藤文書の中の漢詩草稿は、後藤が毛筆で認めた詩を後人がペンで翻字したものである。後藤の文字は行書や草書で書かれてあったようで、翻字した人物が翻字に聊か苦労したような形跡が見られ、誤読した箇所もある。
2．佐藤の漢詩作品については、例えば神田喜一郎編集『明治文學全集　62　明治漢詩文集』の147～149頁に四首が収載されている。同書423～424頁に佐藤の略歴があり、本稿でもそれを参照した。
3．「大阪府立中之島図書館　おおさかページ　～大阪資料と古典籍～」というHPの「コレクション・データベース」の「中之島図書館　貴重書・文庫一覧」に「韓本　2083冊　佐藤六石氏収集（住友家の寄附金で購入。李氏朝鮮時代の板本、活字本、写本など）」とあり、左端の「韓本」をクリックすると、更に詳細内容が記された頁を参照できる（http://www.library.pref.osaka.jp/site/osaka/lib-collect.html）。
4．「十日（水、雨後曇）此の暁二時過より濃霧に鎖さる、巨文島沖は絶えず汽笛を鳴らしつゝ最徐行す、漸く天明くるも陰晴未定・・・」、そして「十一日（木、曇）午前八時頃より濃霧やうやく飛散、徐ろに錨を抜き前進することゝなりたるも、折々濃霧の襲来繰り返され停船しば／＼・・・十時頃より・・・進行を続くることゝなれり、公、男等は大連の遅着は止むを得ずとして前路予定の日取りに影響するなくんば我等身に取りては寧ろ天与の静養時間なりとて元気更にさかんに見ゆ・・・」とある。
5．高野静子編著『往復書簡　後藤新平-徳富蘇峰1895-1929』（藤原書店、2005年）の188～189頁に、後藤が熊本の四大書家の一人である土肥樵石（1842～1915）の書に心酔し、学んでいたと思われることが記されている。後藤の書き方を理解する上で、この記述は注意すべきものと思われる。

〔2023. 4. 13　受理〕

コントリビューター：富永　一登　教授
（日本文学科）